
HAPPY TRAIN

橘 潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HAPPY TRAIN

【ZINE】

Z7405R

【作者名】

橋潤

【あらすじ】

ハッピーハンドの話だけを載せます。

各読みきり方式です。

たまに一、三部で構成されているのも載せます。

濃霧（前書き）

はいはーい

皆さん、はじめまして

私は作者ではないですよ

作者の名前は橘潤たちばなじゅん。

私は彼の書いたハッピーペーペンドの話を紹介する語り手のような存在です。

あ、名前あると思いました？

考えてくれてないんですねよ。

なんか、名前無くてもよくね？とか言い出して…もちろん、次回までには考えておくつもりに言いましたが、念のためここで募集させていただきます。

気に入つた名前があれば使わせてもらいますね

ちなみに、一話で終わるものもあれば数十話続く話もあるかもしれません。

そこはハッキリしてないんですね…。うちの馬鹿作者は…

まあ、長い話はこの辺で終りにしこまじょつか。
では、本編をどうぞ

いつからだろうか。

いつからここに霧が立ち込むようになつたんだろう。
いつからこんなに、霧が濃くなつたんだろう。
思い出せそうで思い出せない。

光を求めて、光は入つてこない。

日が経つに連れ、霧はどんどん濃くなつていく。
霧という檻は、俺を絶対に逃がしてくれない。
霧という檻は、俺一人では決して壊せない。
だから俺は求める。人との関わりを……
だけど、人と関われば更に霧は濃くなる。
この霧は俺を逃がさないためだけじゃない。
誰も俺に、近づかないようにしているんだ……
それでも俺は求める。

ここから連れ出してくれる人を……
誰か……俺をここから連れ出してくれ……

雲一つない青い空。
とてもいい天氣だ。
でも、俺の心はスッキリしない。
雨の日に比べればましだけど……

「銀次！、カラオケ行こうぜ！」

友人の広軌が声をかけてきた。

「別にいいけど…」

「お前…どんどん暗くなつてくよなあ」

そんな事言われても、俺にはどうしようもない。

「何か悩みもあるの?」

「えへっと…誰?」

急に話しかけてきたのは名前も知らない、長い黒髪をボーネルにしている女の子。

「お前、もう一ヶ月も一緒にクラスなんだから名前くらい覚えろよ」

「無理…」

「私は河野沙希。よろしくね」

「あまり俺に関わらない方がいいよ…」

「え?」

俺に関わらない方がいい…傷つけてしまうから…
だけど河野は悪戯っ子のような笑みを浮かべて…

「やだ。私が関わりたいから関わる。それじゃダメ?」

なんて言つてきた。

それなら俺は構わない。

傷ついても責任は取らない。否、取れない。

「銀次とカラオケ行くけど、河野も来る?」

「行く!」

「銀次もいいか?」

「ああ…」

何でだろ……一人といふると霧が晴れてく。

「ねえ……さりげなくさつきの質問を流されてる気がするんだけど……」

「悩みがないって言えば嘘になるけど……今はそれ以上言つつもりはない……」

「わかった。いつでもいいから、言えるようになつたら教えてね。相談に乗るから」

「うん……」

その後は一人とカラオケ行つた。

俺はいつもと同じであまり歌わなかつた。

また、あの夢だ……

濃い霧が立ち込めている森の中を一人歩き続ける。

ただ、いつもと違うのは、僅かに光が差し込んでいる事……

そして、霧の先に見える一つの人影。

それが誰なのか気になつて走つて追いかけるけど、距離が全く縮まらない。

立ち止まって息を整えていると、どこからか声を掛けられた。

どうして霧がこんなに立ち込めてるかわかる?

わからないから困つてんだろ。
そういうお前は何か知つてんのかよ……

知ってるよ。だって僕は……

俺だって言うんだろ。

わかってるじゃん

声が昔の俺にそっくりだからな。

それより、この霧の事知つてんだったなら教えてみるよ。

悪いけど……それはできない。これは君一人で何とかしなきゃならないから……

そうか……

そろそろ時間だな。

変だよな。夢のはずなのに、自分の意思で会話ができるって。しかも、自分と。

そうだね。もう、僕と君は会つことも無いだろ。君の心は良い方向へ変わつていってるから

朝六時。

早く目が覚めすぎたけど、寝る気にもなれない。制服に着替えながら夢の事を思い出す。

夢とは思えないほど、鮮明に記憶している。一階のリビングに向かう。

両親は海外旅行で三年間一度も帰ってきてない。否、帰ってきてはこる。国には。

帰つても家に寄らない。

二年前から一切連絡は取らなくなつたから今は知らないけど……

まず、三年間も仕事しないで暮らせるわけがない。何かしらの仕事はしているはず。

息子の俺にすら言えないような仕事を。

思考をリセッテし、朝食を食べて学校に向かう。

「つはよーー銀次。相変わらず朝はえーなあ」

「そう言つ公軌は珍しく早起きじやねえか」

「たまには早く起きることもあるわ」

「それもさうだな」

俺が軽く笑つと公軌が珍しいものでも見たよつな表情で俺の事を見ていた。

「お前の笑つた顔、めっちゃ久しぶりに見た」

「俺がいつももの凄く暗いとでも言つよつな言葉だな

「実際暗いじやん」

軽く傷ついた。

そんなハツキリ言わなくとも……

「広軌くん、銀二くん、お早う

「おはよ～、河野

「つはよお」

河野つて朝早いんだな～。

「ああ、そうだ。河野

「何?」

「悩んでた事だけど、すぐに解決しそうだ」

「そうなの? 良かつたね。で、理由は何だったの?」

「理由は…」

俺は夢で見る霧の事を話した。

その霧ができる理由も今さつきわかった。

俺は恐れていた。

傷つく事を…

誰かを傷つける事を…

それが自分でも気付かないうちに壁を、檻を作っていたんだ。

誰にも壊せない壁。

自分を守る檻。

でも、今はそれが壊れかけてる。

たつた一人の友達のおかげで…

後は、自分が一步踏み出せばいい。

たつた一步踏み出すだけで、世界は変わる。
二人との出会いで、それを知った。

「ほり、急がねえと遅刻するぞ

「ほり、急がねえと遅刻するぞ

今、止まっていた俺の心は動き出した。

霧が晴れた先にあるのは希望だと信じて……

{END}

濃霧（後書き）

皆さん、いかがでしたか？

楽しんでいただけたのなら嬉しいです。

では、また次回

感想、お待ちしています

人形（前書き）

皆さん、おはよう、こんにちは、こんばんは～
早速私の名前が決まりました！
イエ～イ。

結局作者が前回の話を投稿してすぐに思いついたらしいです。

名前：藍那あいな
性別：女
年齢：19歳
身長：156cm
体重：言っちゃダメー！！
髪：腰まである茶髪
瞳の色：青

体重まで発表しようとするのアビリティありますか…！
と、とにかく本編始めます！

人形

彼は人形だつた。

来るものも去るものも拒まない。

彼の周りにはいつも人が集まる。

それでも、いつも独りだつた。

否、だからこそ、独りだつたのかかもしれない。

彼はいつも心を見せない。

笑つても、それは心からのものではない。

彼は人が自分の傍に集まらなければ静かだ。

自分から話しかける事はない。

彼は同じような日々を繰り返していた。

まるで、誰かに決められた事を逆らわないで行う人形。

誰かにお願いされれば嫌だと言う事無くやる。

それが掃除を代わりにしてだとか小さな事から、お金に関する事でも：

そんな彼はいつも、何かに怯えている。

それは周りの人間に對してじやなく、別の何か：

だから私は、彼が気になるかも知れない。

そんな彼を守つてあげたくて、私は彼に声を掛けたのかも知れな

い。

「ねえ、一緒に帰ろ」

「いいよ」

これだけじゃ他の人と同じ。

だからもう一言、言わなければならぬ。

「嫌だつたら、断つてもいいんだよ」

「別に嫌じゃない」

「本当？」

「ああ」

「うやういれは嘘じやないらしー。」

私は一つ、彼と約束する事にした。

「ねえ、お金の貸し借りだけはしなこつて、約束できぬ?..」

「ああ」

「約束だよ」

「そんなに信用できないなら、何か条件でもつけるか?」

「うん。それじゃあ、破つたら言つ事を一つ、必ず聞くつてのはど

ういふ

「いいよ」

これでもし、お金の貸し借りをしても私の田的は達成できる。
簡単な用で難しい事。

翌日、彼はお金を貸してと言つてきた人に対して、お金の貸し借りをしないって約束してるから無理。と、言つた。

私の事を言うかと思つたけど言わなかつた。

次の日も…その次の日も、彼は約束を守つた。

みんなは彼がお願いをすれば何でもしてくれると思つてゐる。
でも、それは違う。

彼はお願いよりも約束を優先する性格だった。

私はいつも、彼と一緒に帰つた。

一月もすれば、彼と帰りにカラオケに行つたりゲーセンに行つて
プリクラを取つたり、遊ぶようになつた。

そうして時は流れ、彼は少しずつ、心を開いてくれた。

それは他の人と一緒にいる時に見せる表面上のものではなくて、
心からのものだった。

ある日、私は彼に、とある公園に呼び出された。

彼から話を持ちかける事はめったにないから少し楽しみ。

私が公園に行つた時にはすでに彼がいた。

私が声を掛けると、彼は真剣な表情でこっちを見た。

その表情に、どんどん鼓動が早くなつていく。

やつと気付いた。

私は彼の事が好きだから、気になつてたんだ。

それは友達とか憧れじゃない。

恋愛感情。恋人としての、カレカノとしての好き。

彼の口がゆっくりと開かれる。

鼓動はさつきよりも早くなつっていく。

期待に胸が膨らむ。

「俺と付き合つてください」

私は頷いた。

嬉しかった。

とても、嬉しかった。

その日、彼は完全に人形じゃなくなつていた。

いつも何かに怯えていた瞳は、スッキリとしているようだつた。

もう一つ、私は気付いた事がある。

それは、私も彼と同じで、人形のよつに過ごしていたと。

人形（後書き）

あれ？

これってかなり暗い話じゃない？

と思った人は言ってください。

作者に消すように言つんで。

さて、作者とお話しないと…

では、また次回へ

絆（つながつ）（前書き）

皆さん、お呼びへ、じんてうは、じんぜんは。

ひの作者、珍しく三回連続投稿してゐる。

私の出番があるから嬉しいな

では、本編をどうぞ

絆(つながり)

私は世界が好き。

大切な人のいる世界が。

俺は世界が嫌いだ。

大切な人を奪う世界が。

私は人が好き。

友達がどんどん増えていくから……だから嫌いにならない。

俺は人が嫌いだ。

もう一度と、大切な人を失いたくないから……だから、好きにならない。

私は歌が好き。

詩にはちゃんとストーリーがあつて、音楽がそれを鮮明にイメージさせてくれる。

俺も歌が好きだ。

ヘッドホンで音楽を聞いてると、周りの音が聴こえなくなるから。

私は光が好き。

私を優しく包み込んで、暖めてくれるから。

俺は闇が好きだ。

俺と言う存在を飲み込んでくれるから。

全く違う一人の思考。

なのに、二人はいつも一緒にいる。

少年がいくら避けても、少女は追いかける。

少年は絆を持っていた。

その絆が理不尽な世界の所為で断ち切られ、孤独になった。

少女は孤独を知っていた。

孤独と言ひ辛さに耐えられなくなり、絆を求めた。

今の一人は絆はない。

自ら絆を断ち切る者と、本当の絆が見つからない者。

そんな二人の間に、小さな絆が生まれ始めている。

恋と言ひ名の絆が……

絆（つながり）（後書き）

相変わらず暗いのか明るいのか分からぬ話ですよねえ（苦笑）

でも、一応ハッピーエンドだからなあ：

感想、お待ちしていまます

記憶（前書き）

皆さま。おはよー、こんばんは、こんばんは～
藍那です。

一日聞いてしまいましたねえ。

作者はこれでも頑張っているやつです。

今回の本編はハッピーホンダですけど暗いと感じます。
これは作者にも微妙なようです。

今日は後書きはないです。

記憶

彼は記憶がなかつた。

直前に精神的なものでも、肉体的なものでも、強いショックを受けたわけではない。

自室のベッドで目を覚ました時には記憶を失くしていた。私はいつものように彼を迎えて来ただけだけど、彼の母親にその事を聞いてすぐに部屋に駆け込んだ。

「か……お、り……？」

ベッドから体を起し^{起こ}している彼は、確かに私の名前を呼んだ。記憶喪失と聞いていたのに、私の名前を知ってる。

親にも頼んで私を騙したんじゃないだろうかと、思った。

「春人^{はるひと}……私のこと覚えてるの？」

念のために聞いてみた。でも、帰ってきた答えは望んだものじゃなかつた。

「何でだらう？君の事は知らないはずなのに……」

嘘であつて欲しかつた。いつもみたいに冗談だよつて言つて欲しかつた。

「でも……何だかとても落ち着く。君はさつきの母親と違つて、とても特別な存在みたい」

とても優しい笑顔。落ち込んでるときにいつも励ましてくれた、

私の大好きな、春人の笑顔。

「ねえ、僕について君の知ってる事を教えてくれないかな？」

私は自分の知ってる春人のかっこいいところ、かわいいところ、意地悪な性格や、そんな春人が好きって言った。

勢いで告白しちゃつたけど気にしない。私は正直な気持ちを伝えただけ。

「香織

「な……っ！？」

彼に名前を呼ばれて顔を向けた口が何かに塞がれた。目の前にあるのは彼の顔。塞いでいるのは彼の脣。ゆっくりと、彼の顔が離れていく。

「僕も香織の事が好きだよ」

彼からの告白。記憶を失っているんじゃなかつたの……

「何故か君の話を聞いてると、いろんな事が頭に流れ込んでくるんだ。それは全て、君との思い出」

「それじゃあ、記憶喪失ってことに変わりはないの？」

「うん。覚えてているのは自分の名前。思い出したのは……」

そこで一旦、言葉が区切られる。

「君との思い出と、自分の思い」

彼は記憶を失くしているんじゃない。思い出せなくなつてるんだ。

私達は幼い頃からよく、一緒に遊んでいた。彼の記憶のほとんど
は、私と一緒に過ごしていたもの。

私は誰よりも彼と一緒にいたから、彼の心に残っているんだと思
う。

私の思い出が。

彼の…私に対する想いが…

哀・喜（前書き）

皆さん、お久しぶりです

サブタイの意味は読んでると分かります。

それにもしても、いつもの如く短いですね～。

作者は『構想段階はもうと長かったんだよ。でもね、書いてると短くなんの。何で?』と、言つてました。

いや、聞かれても……ねえ……。

まあ、そんなくだらない話は置いといで、本編に行きましょ～

哀・喜

パチパチパチ

彼が登場したら盛大な拍手が上がった。

彼は椅子に座つてピアノの蓋を開ける。拍手は止み、静かになる。空気が張り詰める。みんなの期待と、彼の不安によつて、ピンと張られたピアノ線のように、それぞれの気持ちがピークに達した。彼の指が鍵盤の上を踊り始める。張り詰められた空気は徐々に緩み、心地よくなる。

それと同時に私は、とても悲しくなつた。彼はもう、時の人。私の住んでる世界とはかけ離れた場所に行つてしまつた。おそらく、もう彼は私の事を覚えていない。

音が止んだ。演奏がもう、終わつたんだ。

パチパチパチ

さつきよりも、盛大な拍手が上がる。切ない。できればもっと、聞きたかった。でも、それはできない。これ以上、彼の顔を、演奏を聞いてたら、別れづらくなる。また、聞きたくなる。会いに、来たくなる。

ダメ。早く帰ろう。せつかく決めたのに、ここに居たら意味がなくなっちゃう。

静かに、泣いてる事を気付かれないように外に出る。やつぱり、まだ夜は寒いな。雨が降つてたら、泣いてる事を誤魔化せるのに……。

会いたい。

「会いたいよ……」

涙が止まらない。これで最後つて決めたのに……。
泣きながら、明日の朝にはチェックアウトするホテルに入る。人が見てる。でも、気にならない。
だって、目の前には……。

「久しぶり。って、何で泣いてるんだー!?」

彼が居たから。

彼は私が泣いている事に驚いて駆け寄ってきた。

「どうしたんだ? 何かあったのか?」

「バカ……バカア……」

彼の胸に顔を埋める。

嬉しい。覚えててくれた事が、もう一度、彼に会う事ができたのが。

彼は困惑してる。そんな彼が面白くて、可愛くて……。
やつぱり、お別れなんてできないな。もし、彼が私の事を好きじやないとしても、構わない。友達でもいいから、一緒に居たい。
彼から離れて、今できる最高の笑顔で……。

「教えない!」

今はこの、一時の幸せを味わいたいから。

哀・喜（後書き）

皆さんのが言いたい事は大体分かりますよ。

『これってハッピーハンドなの！？

まつて、ねえ、これってハッピーハンド投稿用の短編集だよね？どう考えても悲しくない！？

『最後はハッピーだね。』

何で疑問系？…どう考えてもこれ、ハッピーでもバッドでもないアンハッピーハンドってやつでしょ！…？

『ハッピーカー…』

うつさいって何！？てか、なんで紙に書いたのが降つてくんの！？どっかで聞てるでしょ！…？

『長くなつやうだから終ります…』

ちよ、また…！

嬉（前書き）

タイトルは思いつかなかつたそうです。

漢字一字なのは、喜怒哀楽の喜を嬉に変えたやうです。

三年ぶりに彼を見た。

でも、彼は知らない女性と一緒に歩いていた。
気付かれないようにそつと、彼の側を通り過ぎる。だけど、急に後ろから手を掴まれた。

振り向いて手を掴んでる人を確認する。

「どこに行く気だ？」雅^{みやび}

彼の顔を見つめる。まだ幼さが残る顔立ち。何で、私を引き止めたの。

「その子だれ？」

「ん、さつき話した……」

女性の問いに彼は私の腕を引っ張り、腕を肩に回して抱き寄せる。

「俺の好きな人」

「え……？」

彼の発言の意味が理解できない。いや、理解はできる。だけど、信じられない。だって、彼は……。

「ああー告白する前に転校しちゃった人

え、どうこう……話についていけない。だって彼は、私の告白に悪いくらいで言つたじゃない。

「ああ。ここから告白してきた時は焦ったよ。その場で返事するか、用意ができたからするか」

「用意できてから?」

じつこつ事。何を用意できてからなの。

「それじゃ、邪魔するのもあれだから、私帰るね

「悪い使わせちまつて悪いな」

「いいよ。私のお願ひも聞いてくれたし。じゃあね」

女性は帰つていった。

話がどんどん分からなくなつてく。

「ここじゃ話じづらいから、移動しようか

「うそ……」

彼について行く。

着いた場所は綺麗なマンション。ここに彼は住んでるみたい。

「ここで少し待つてくれ

「わかった……」

彼は中に入つていった。少しだけ出てきた彼は、手に小さな箱を持っていた。

「一つ聞いてなかつたな

「何?」

「誰かと付き合つてゐるか?」

「ううん。要一は?」

「付き合つてねえよ。お前にまだ、俺の思いを告げてねえから

それって、もしかして……。

鼓動が早くなる。顔が少し熱い。

「俺も好きだよ、雅」

小さな箱を差し出してきた。綺麗な水玉模様のピンクの包装紙に、赤い紐でラッピングされた箱。

彼の顔を見ると、頷いた。開けてみてって事だよね。

箱の中に入っていたのは、綺麗なネットクレス。ハート型の穴が開いてて、それに合うサイズの小さなハート。穴の開いてるやつは、穴だけでなく、外もハート型。

「綺麗……」

光に当たると、淡いピンク色になるんだ。

「本当はプレゼントを用意してから告白したかったんだけど、先にお前が告白してくるもんだから計画が狂った」

「そ、それは……」

「引っ越しす前に伝えたかったから。だろ?」

「うん」

学校を卒業するのと同時に告白したから、みんなは転校する事を知らなかつた。卒業をしても遊ぶ事があるだろ?けど、私は人と話すのがそこまで得意じやなかつたから。

「今でも、俺の事好きか?」

「うん!」

嬉（後書き）

恋愛モノ多いな。

まあ、特に触れるることもないんで今回はこれで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7405r/>

HAPPY TRAIN

2011年4月15日02時10分発行